東南アジア研究　44巻2号　2006年9月

現地通信

探して巡る

水　谷　康　弘*

「もう終わった？」
「いや，まだです」
　歯切れのわるい返答に，D中佐は大げさに困った表情をつくってみせた。
「いつになったら終わるんだよ。あたしだって，いつまでもここに居るわけじゃないよ」
　警察局に立ち寄って知り合いの将校に挨拶すると，向こうの第一声は必ず「もう卒業したか」である。そのたびに同じ返答をしなければならないというのは，どうも少々きまりが悪い。

　2002年の暮れ以来だから，D中佐と知り合って3年以上になる。
　2001年7月から2002年5月まで，私は日本財団のAPIフェローシップ（The Nippon Foundation Fellowships for Asian Public Intellectuals）から助成を受けて調査のためバンコクに滞在していた。フェローシップ期間が終わったあとも間髪をいれずバンコクに舞い戻って，さらにあと2年，滞在調査を続行した。初めて警察局を訪れたのは，この合計3年にわたるバンコク滞在がちょうど折り返し地点にさしかかった頃のことだ。
　なぜ足を運んだかといえば，過去の年次報告書を閲覧するためであった。BTSのサヤーム駅を降りて高架沿いに東へ歩いてゆくと，アンリ・デュナン通りの向こう側に警察局の敷地が見える。旧ワールドトレードセンターのほうから行く場合は，南に下りてそのままラーマ一世通りを渡ればよい。信号正面の警察病院に隣接してその西が警察局である。いずれにしても，ちょうど繁華街と繁華街の谷間にあたる場所なので，旅行者はたいてい素通りしてゆくことになる。
　はじめての日，受付を通して正面の一番大きな建物に入り，用件を告げた。図書室で相談せよ，という返事だったので，さっそく場所を教えてもらって押しかけた。このとき応対してくれたのが，くだんのD中佐である。図書室の奥まったところに学術部の一部がスペースを構えており，そこが彼女の仕事場になっていた。中佐も含めて，学術部の円滑な運用を担っている将校の多くは女性である。
　学術部というところは，図書室を管轄するほか，局内で出される各種文書，さらに関係法令も扱っている。ある部署から他の部署へ文書上のことで問い合わせを行う際にも，学術部を通すことが多い。D中佐は図書室を担当していたわけではなかったが，私の用件に好奇心を煽られたらしい。
　1950年代以前の年次報告書を見せてほしいと頼んだところ，司書といっしょに図書室のあちこちをひっくり返して何冊か探し出してくれた。しかし年次が揃っていない。というか，そもそも報告書の残っていない年度のほうが圧倒的に多い。当時，官庁で文書を探すということに対して認識がまだ甘かった私は，おもわず詰問調で語勢を強くした。
「なんで保管しないんですか」
そんな不躾な物言いにも，中佐は鷹揚にかまえて機嫌をそこねた様子もなく，
「だって汚いから。あんな大昔のもん，なんで保管するの」
と，あっさり答えたものである。
　この日以降，私は図書室に通っては棚をひっくり返して「大昔の」資料を探索することになった。それは同時に，警察局の建物と敷地をぐるぐると探検することであり，現在の警察組織の雰囲気の一端に触れることでもある，と知るようになったのは，何カ月も経ったあとのことだ。

* Mizutani Yasuhiro, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科；Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

一例をあげれば，こういう具合になる。

図書室にある局内の古い業務手引きや雑誌を読んでいると，『局規定（kho bangkhap）』『局命令（khamsang）』『局通知（caengkhwam）』なるものがしばしば顔を見せる。これらはすべて局内を律するため折りに触れて局内で公布されるのだが，ほかにも『局規則（rabiap）』『特定事項記録（banthuk khokhwam）』などなど多様な文書があり，部外者にとっては相互関係と位置づけがよく分からない。そして何より実物にあたって抜粋ではなく全文を読みたい。そこで中佐に質問しに行く。

まず局の公文書の分類については，学術部の上の階にいる将校に尋ねて来い，ということなので，紹介してもらって赴くことにする。質問しているうちに，さらに知らなかった単語が増えてゆく。たとえば私が扱っている時代であれば，局規定が最も基礎となる位置を占める。ところがこの『局規定』は，警察局のみならず内務省の『省規定』『省命令』あるいは内閣の『回状（nangsu wien）』も参照しなければ理解できない，という。しかも，個別具体的な事件が起こった場合の『命令』『報告』『調書抄録』などは，これらとはまた別の系統を形成しているのだ。

……まあ，よい。個人的に公文書のレクチャーをしてもらう約束は取りつけたので，もう一つの質問をしよう。

「ところで大昔の局規定や局命令を見せてもらえますか？」

「捨てたんじゃないの？」

予想通りの答えだが，続きがある。

「でも，副局長秘書室にいけば，見つかるかも。聞きに行く？」

で，副局長秘書室から法務部，登録部へと順に紹介されて，３日後に成果のないまま手ぶらで図書室へ舞い戻ることとなった。それについて司書と喋っているときに愚痴をもらすと，「あれって地下の倉庫に放り込んでなかったっけ？」という思わぬ返事。中佐が再び学術部の別の将校に連絡をつけてくれる。

またまた数カ所のたらい廻しを経て，たしかに地下倉庫から目当ての時代の『規定』『命令』を見つけ出すことができた。ただ，例によって紛失した年度が多い。その後の経緯は割愛するが，紛失した年度の一部については，巡り巡ってウィパーワディー通りの公安警察で入手することになった。2000年ごろ公安で保管されていた文書が大量に廃棄されたが，その一部を持ち帰って自宅に保管していた将校がいたのだ。

ほかにも各種便覧とか講義録とか上級将校の訓話とか，この調子で入手したものもあれば，とうとう入手できなかったものもある。

だが，私が本稿で強調するのは，結果ではなく過程のほうだ。とにかく世間話が多かった。たらい廻しになった先ざきの部署で，待たされているあいだに暇そうな将校と世間話をする。質問に赴いて相手が答えを知らなくても，そのまま帰るのはなんだか勿体ないので世間話をする。本局から遠く離れた部署まで行けば，帰りがけには将校が車で本局まで送ってくれるというので，渋滞にまきこまれながら車内で世間話をする。

たまに中佐に呼ばれてオフィスでコーヒーのお相伴にあずかる。D中佐は，女性の警察将校としてはすでに出世を極めたといえよう。大佐以上の階級を得ることは，まず無い。自分がこれ以上出世競争に血道をあげることはないので，退役まで他人のゴシップを日々の肥やしにしつつ，無理はせずに仕事をこなしてゆくつもりらしい。有名無名を問わず，将校たちの噂を織り交ぜて世間話をする。

たいそう面白い経験であった。ずいぶん知識も増えた。しかし，それだけではない。

ひとつ重要なことは，私がこの時期のこの経験を通して自分自身の懸案と折り合いをつけたらしいということだ。懸案とは，フィールドワークに関するそれであった。フィールドワークを標榜する研究科にあって，文書資料により「大昔の」ことを調べようとしている自分は，はたしてフィールドワークをしているのか，とバンコクに住み始めたころは自問していたわけである。

なんといっても私の調査の主役は文献だ。上記の経験はあくまでも，紙に書かれた資料を探すプロセスのなかで起こった付随現象である。私は世間話の相手をした将校たちの大部分について，その私生活やライフヒストリーをまったく知らない。

さらには，ついにリサーチのなかで系統立ったインタヴューというものを一度も行わなかったし，なにかのイベントに積極的に参加し観察することも，長期で地方に赴いて日常的な警察業務に触れることもなかった。私が論文を書くときは，紙に書かれた資料にしか言及しないだろう。

にもかかわらず，あのコンクリートの建物のなかを，あるいはバンコクのあちこちに分散している警察の各部署を，１年半のあいだ文書資料を求めて彷徨し堂々巡りをくりかえしたのは，まちがいなく自分なりのフィールドワークであったと何の裏づけもなく思い込むことができるようになったのだから，こんなに有り難いことはない。思えばそういうプロセスにおいて他愛もない話を様々な人とくりかえしたからこそ，まがりなりにも公文書や雑誌や葬式本などの文献を面白おかしく読むことが可能となったわけで，とくにその端緒を開いてくれたD中佐には，いくら感謝しても足りない。

前回挨拶に立ち寄った折，そのように説明してD中佐に感謝の念を述べた私である。中佐は満足げにうなずいた。

「そりゃ仕事の基本だねえ。ほら，『その土地を知り，人を知りなさい（ru cak thongthi ru cak khon）』って言うでしょ。でもあんた，そういうこと考えるのも悪くはないけど，いい加減に卒業しなさいよ。で，もう結婚したの？　誰か紹介してあげるよ」

……恐れ入ります。